

庭園から都市へ、そして再び庭園へ 作品2000-2003年

Between Garden and Landscape Projects 2000-2003

岡田 憲久

Norihisa Okada

庭園の歴史とは、様々な民族や国においてそれぞれの自然環境に培われた自然観を背景として展開してきた理想郷の表現である。樹木・水・石などの自然の生きた素材で構成されてきた空間である。権力者の私的空間の中で熟成されてきた庭園の意匠は、19世紀以降ランドスケープデザイン（緑の環境デザイン）として公共空間の中でその意味と意匠を展開してきた。しかし公共的空間の中で求められる様々な機能の中で庭園の中にあった「何か」が失われていってしまっているように思えてならない。

日本の歴史的庭園の中にあった意味と意匠の展開を、現代の空間にどのように描けばよいのだろうか。

あるものは意味もなく単調に繰り返される人間の手業の集積が全体空間を形づくる。あるものはより何もしない余白地を作り出すための、境界のみをデザインする。意味はあえて指し示されない。見る者に応じてその時々の意味が、その時々時間に応じて立ち現れる。

－ 椋山女学園大学 生活社会科学科棟前庭園 名古屋市千種区 2001 －



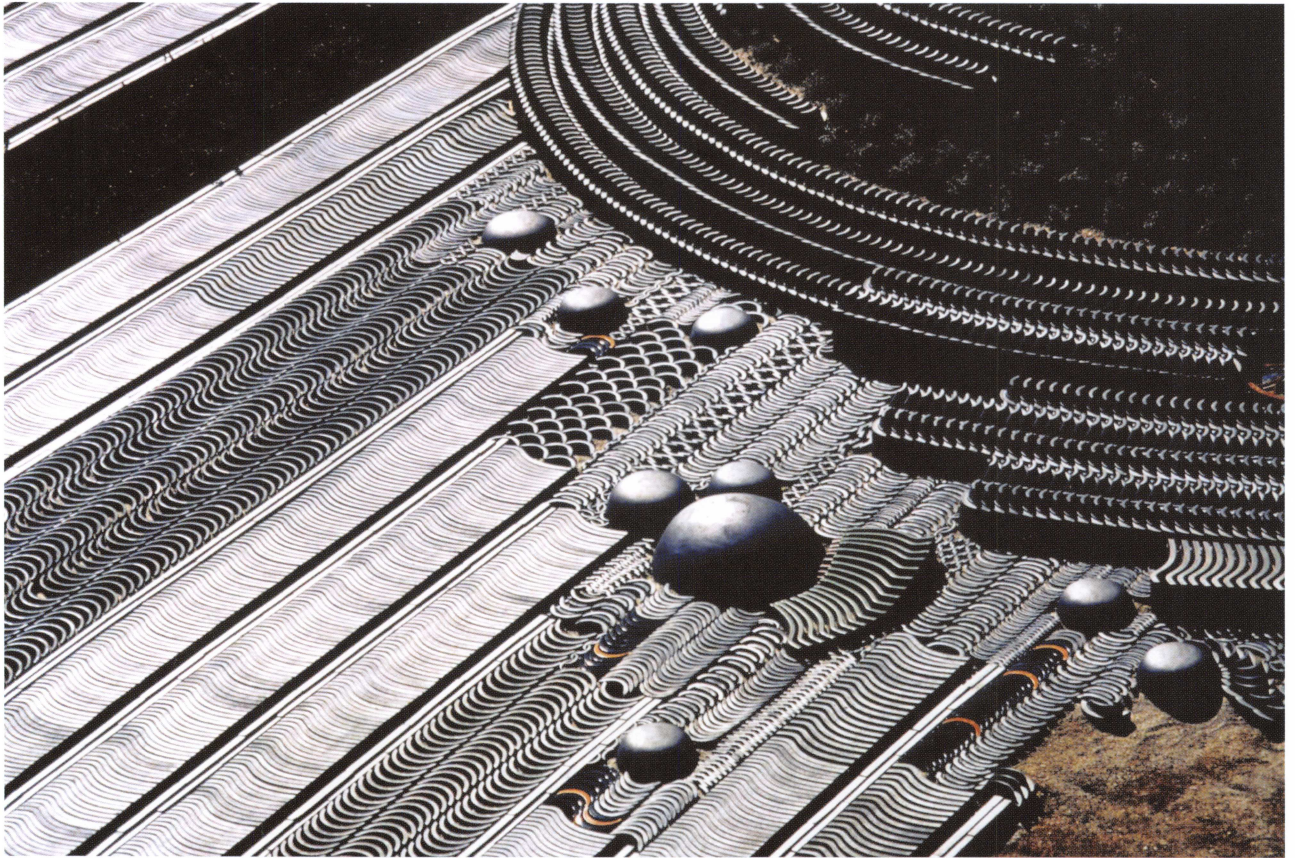
延べ石には岐阜県恵那のミカゲ石廃材。この石の際には、中部の地場産業である焼物、瀬戸や常滑のレンガ、土岐の緑鮮やかな織部釉陶板、エングロ、そしてツク等をモザイクのように並べた。



円形のミカゲ石廃材に手を加え、点景とした

生活社会科学部棟前に花壇を、という依頼を受け、コンクリート舗装だった部分をはつり、植栽帯を区切る縁石をデザインにより、単なる花壇にとどまらない庭園空間の創出を目指した。素材には、自分の足で歩いて出会った石、陶板、レンガなど、地場のものを用いた。

焼物のテクスチャーやモザイク模様の繊細さと、矢跡が残る割り肌の荒々しい延べ石との対比が際立つ。植栽は四季を通じて花と緑が絶えない計画とした。



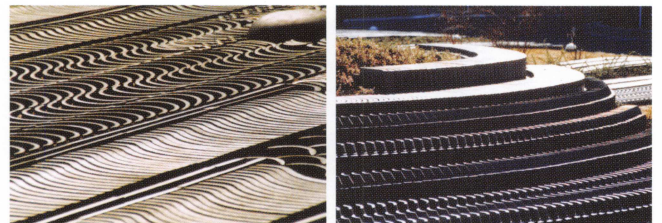
ボーダーと円がぶつかり合う部分には、各種の輪違（わちがい）を詰め、織物のように凝縮した空間をつくり、その中に留蓋（とめぶた）や高浜の鬼師が作成した巨大な半円球を星のように散らした。

高浜は瓦の町である。この町の玄関、名鉄三河高浜駅前ロータリー空間を瓦の庭園とした。この庭園を「かい（海）」と名づけたのは、瓦の紋様と瓦のボーダーに挟まれた花の帯が波をあらわし、昔は海であったという高浜の過去の記憶と現在をつなぐ意味をもたせたかったからである。

屋根材という見なれた役割をになう前の、「瓦」そのものの形態の集積が、庭園において途方もない力を生み出し、それを見る人々が驚きと共に、瓦の新たな魅力を発見することを願っている。

瓦は屋根材としても使用頻度の高い、サン瓦、ノシ瓦、素丸という3種類のいぶし瓦を主に用い、これらを小端立てして全体のリズムをもたせながらボーダーを作る。既存のクスノキの大木の周囲は当初の根鉢の高低差を利用しながら素丸を小端立てしたサークルを順に立ち上げる。サークルは渦巻く波である。ここに庭園の力が最も集まり、デザインを引き締める。そして駅を降りてペDESTリアン・デッキを渡る人々の視線が最初に集まる箇所となる。

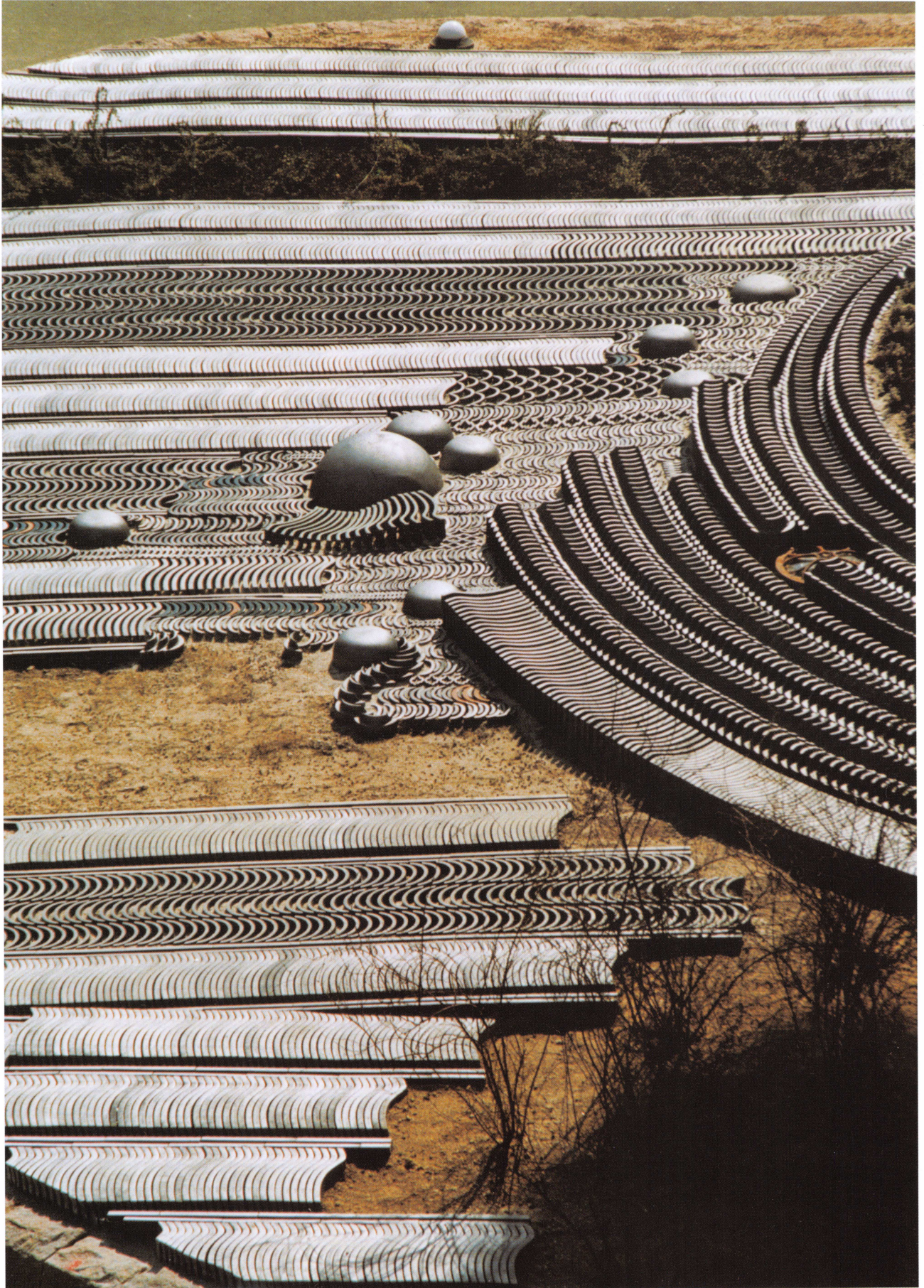
植栽は既存樹木その他、庭としての風情が楽しめるよう、季節の花の咲くものを選択した。グラウンドカバーは芝生の他に、タイムとローズマリーを瓦のボーダーの間に植栽する。これらは常緑の、花と共に香りも楽しめる強健なハーブである。低灌木としてはユキヤナギとフヨウの仲間を選んだ。長期に渡って瓦のボリュームに負けない花々で見る人を楽しませてくれるはずである。



ディテール



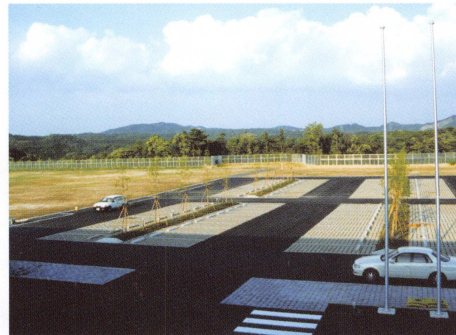
名鉄三河高浜駅ペDESTリアン・デッキから見る



基本的にボーダー部分には棧瓦（さんがわら）を、クスノキの根元、円の立ち上がり部分には素丸（すまる）を用いている



研究棟エントランスホールより望む景。右手にはユリノキのグリーンベルトが位置する



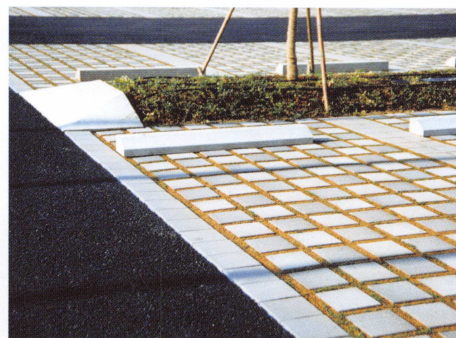
駐車場から山並みを望む



駐車場近景



研究棟の北側には、ユリノキの帯を挟んで山並みを背景とした空景の舞台が広がる



駐車場ディテール

名古屋東部丘陵の約70haの敷地に建設されたJR東海の技術研究研修施設に伴うランドスケープ・デザイン。

研究棟が建設された北側の造成地は山を切り、その土の一部を北に向かって押し出した土木造成による9.6haという広大な平坦地。連なる山並を背景としたこの何も無い空間は、本来ならば自然に対して暴力的だと思われる行為の結果であるにも関わらず、人工と自然との明確な対比がそこには当初から美しく現れ出でていた。

このため、この広がる大地を「空景の舞台」と名づけ、最低限のおさめをデザインすることがこの場にふさわしいと考えた。

余白にはその時々風の舞い、空を映し、またその余白は周囲の景色をより際立たせ、見る人の心にもそれぞれの景を映し出す。



研究棟南側。ブリッジは搬入路



研究棟西側のチャート碎石による犬走り

－長久手町「福祉の家」 露天風呂日本庭園・中庭 愛知県長久手町 2002－



露天風呂湯口。滝口からの水が湯舟に接して流れている



打たせ湯と美濃石の石垣



滝石組。背景には白玉椿の大本

愛知県長久手町に都市農村交流のための田園バレー構想の拠点施設として「福祉の家」が2002年12月にオープンした。デイサービスセンター等を備える福祉ゾーンと一般の人も楽しめる温泉ゾーンからなり、建築総床面積は約7,800㎡。施設全体を里山のコナラを中心とする雑木林の景観で囲いこんだ。

露天風呂は九山八海の石組み、浴槽、湯口、洞窟風呂、打たせ湯、滝、流れて構成される。中庭は様々な形状の瓦を組み合わせて曼荼羅のような円を二つ描き、流れるような曲線で繋げた。



中庭の瓦紋様

－JR東海道本線岐阜駅高架下連絡通路広場（仮設） 岐阜県岐阜市 2000－



植栽広場の吹き抜け部分。中心に生命の樹タブノキが植わる



改札を出るとまず「花の海」が迎える



通路の両脇にはヤマモミジなどの雑木が植わる

－I邸 名古屋市瑞穂区 2003－



古材の瓦と板石の組み合わせが自然林に向かって延びる

－A邸 名古屋市千種区 2001－



ステンレスの笥から石の水鉢に水が静かに落ちる